

アルメニア共和国での国際援助活動

－ JICA アルメニア国リプロダクティブヘルスプロジェクトの経験から－

野口 真貴子（東京女子医科大学看護学部）

アルメニア共和国はコーカサス三国のひとつで、90%以上が標高 1000 mを超えると九州よりやや小さい国土に約 300 万人のアルメニア人が暮らしている。独立行政法人国際協力機構 (JICA) は、アルメニアで初の技術協力プロジェクトとしてリプロダクティブヘルスプロジェクトを 2004 年 12 月より 2 年間にわたり実施し、そのチーフアドバイザーとして活動させていただいた。このプロジェクトは、3 か所の産婦人科病院における妊産褥婦と新生児の健康を改善するために、科学的根拠に基づいた周産期医療とケアを導入した。同時に無償資金協力として、同施設に必要な機材を供与することで、政府開発援助 (ODA) の代表的なスキームによる相乗効果が図られた。

旧ソ連時代は日本との ODA は考えられなかったアルメニアでも、日本の高度な医療技術、最新機材に期待する傾向があった。しかしプロジェクトも終盤となった時、アルメニア人医師から、「ケアという言葉は私たちの言葉にもありますし、自分たちも当然、ケアをしていると思っていましたが、日本のケアを知り、初めてケアという言葉の本当の意味がわかりました」と言われた。「ケア」という人とかかわりが実感を伴い理解されたといえる。その人がいる場にたち、相手を思いやりつつ尊重し、心から話を聞き、手をさしのべるという日本のケア。プロジェクトを支えてくださった多くの方々がケアの心もち、自らを開いて丁寧にかかわってくださったからこそ、この地で受け入れられたと考えている。

国際援助の場では、時には硬軟あわせもった交渉戦術も必要とされる。しかし、相互に信頼する、尊敬しあえるという人間関係が根底になれば、表面上のやり取りが繰り返されるだけで、多額の資金をかけて供与した機材は使われず、教育した技術も根づかない。丁寧に人とかかわるという日本のケア提供者が日々おこなっていることの意味、大切さを改めて認識し、伝えることが、このような経験をさせていただいた私の課題と考えている。
